

「美濃という古い岐阜の地名が好きだ。
美しく濃い、という字が、
私にすぐ墨を連想させる」

—『朱泥抄』篠田桃紅

岐阜出身の父の影響で

幼いころから岐阜の文化に触れ

「岐阜は心の故郷」という桃紅

今、岐阜で
観られる桃紅。



岐阜現代美術館

「篠田桃紅1980年代の作品から」
2021年1月8日(金)～3月19日(金)

休館日:第2・4土曜日、日曜日、祝日、
1/15-18、2/26-3/1、3/12-15

5歳で墨と筆を手にしてから創造の旅を歩み続けてきた桃紅。桃紅が自身のスタイルを確立し、洗練の度をさらに深めていった1980年代の作品を展示します。

関市桃紅大地1番地
TEL:0575-23-1210



関市立篠田桃紅美術空間

「桃紅とその時代—百人一首」
2021年1月7日(木)～3月26日(金)

(2/15展示替え)

休館日:月曜日(休日を除く)、
祝日の翌日(ただし1月11日は開館)

岐阜県出身の守屋多々志(1912-2003)は歴史画の第一人者。守屋の端正な画と桃紅のかんかなの美による『篠田桃紅書 守屋多々志画 百人一首』(1983、学習研究社)の原画を展示します。

関市若草通3丁目1番地
TEL:0575-23-7756



岐阜県美術館

「篠田桃紅と抽象の世界」
2021年1月13日(水)～3月28日(日)

休館日:毎週月曜日
(祝日の場合は翌平日)

自らの新しいかたちを創りだすことを希求し、墨のもつ可能性、そこに表れる時間や空間と向きあい続けた桃紅のかたちをご紹介します。

岐阜市宇佐4-1-22
TEL:058-271-1313

篠田桃紅と 抽象の世界

2021.1.13.wed—3.28.sun

TOKO SHINODA

篠田桃紅

THE NEW YORK TIMES, FRIDAY, MA Toko Shinoda Displa

By JOHN CANADAY
It is a rare artist whose
modernism is rooted in tradi-
tion without compromise in
either direction. Toko Shino-
da, in a new exhibition of
Sumi paintings at the Betty
Parsons Gallery, 24 West
57th Street, is such a rarity.

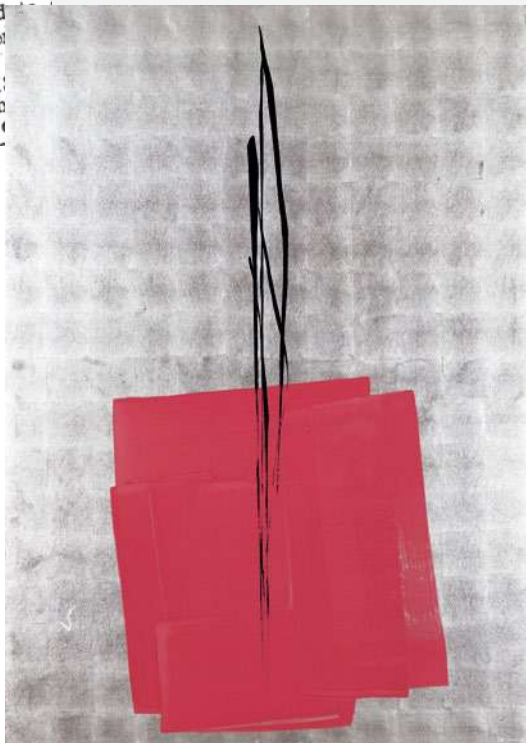
ancestry — nat
Shinoda as a J
adopted by Kli
recent Americar
ered that the
Oriental callig
revamped
of model
sion.
Miss
from th
demic

明るい朱の中に凛と立つ墨の線《人よ(II)》。まさに、篠田桃紅以外の何ものでもない。1980年代の終わり、青山の自宅兼アトリエを訪ねた。公立美術館では初めてとなる大々的な個展の開催をお願いに行ったのだ。思えばその時既に70代でいらしたのに、放たれるオーラと身にまとう華は、この作品そのものだった。桃紅は、1956年、43歳の時に作品をあらかじめ船で送り、ひとり渡米する。筆者は40代を迎えた折、そんな決意と勇氣には程遠い自分を情けなく思ったものである。

抽象表現主義全盛のNYに滞在した2年足らずの間に、ボストン、NY、シカゴ、シンシナティ、ワシントンと各地で個展を開き、己の表現に対して確信を得るとともに、墨と水にふさわしい風土を身をもって知り、帰国する。60年代の作品にはNYでの個展を意識した力強い筆致の大作が多く、発表の拠点が日本へと移るにしたがって、80年代には、抽象の中にも風景やどこから具象性も感じさせる抒情的作品へと変化していくのである。

岐阜県美術館副館長 正村美里

伝統に根差した
モダニズムの仕事で
そのいずれにも妥協しない
非常にまれな芸術家



《人よ(II)》1988

桃紅は、今春108歳になる。ずっと伸びた背筋にさらりと着物を纏った立ち姿。独自の世界観を美しい言葉で綴ったエッセイ…。抽象絵画作品だけにとどまらない桃紅の魅力の核となっているのは、「私の主人は私自身」という生き方を貫く「強さ」と、しなやかな「潔さ」であろう。鋭い墨線や清々しい余白が美しい水墨作品は、凛とした桃紅自身に重なる。

4年前、雄大に聳える富士を望む山中湖の山荘でお目にかかったときのことだった。桃紅は、ここに来ると、よく女学生だった頃のことを思い出すのよ、と言って、ドイツ人音楽教師から教わったシューベルトの「野ばら」の一節を歌ってみせてくれた。

Sah ein Knab' ein Röslein stehn.
Röslein auf der Heiden.
「強さ」と「潔さ」の桃紅がドイツ歌曲を口ずさむ姿は少女のように初々しく、私には全く新しい



東京文化会館ロゴ

なお、現在は、感染症対策で換気を重視するためロゴフラッグ掲出を一時見合わせ。大ホールのロビーには、変わらずロゴフラッグが吊られており、館内に入れば、パブリックエリアからもみることが出来る。感染症が終息し、風に揺れる桃紅の文字に再び会えることを心待ちにしたい。

岐阜県美術館学芸員 鳥羽都子



発見だった。桃紅の歌を聴いたことがある学芸員は世界中をさがしても私ひとりではないかしらと、そのときのことを思い出すと嬉しくなる。

公益財団法人岐阜現代美術財団
シニア・キュレーター 宮崎香里

“音楽の殿堂”とも評される東京文化会館(上野公園)は、建築家前川國男の代表作の一つ。1999年のリニューアルオープンの際、当時国立西洋美術館館長であった美術史家 高階秀爾らの「海外の音楽家にも親しまれてきた館を日本の書字で表象することこそ再生と未来を示す」との推挙により、桃紅がロゴを手掛けることとなった。

桃紅は、「日本の建築と書展」(1953, ニューヨーク近代美術館ほか)出品や、丹下健三設計の建物の壁画といった建築に関わる仕事も多い。それが文字であるか抽象であるかを超え、モダニズム建築のスケール感にも匹敵しうる桃紅芸術の証といえよう。

上野の駅に降り立ったら、ぜひ、目の前の建物を見上げてみてほしい。「上野の森の息吹きと風の薫り」を纏った、桃紅の風韻漂う文字が迎えてくれるはずだ。

篠田桃紅